

でも、それが大学に実質的な影響を独自に与えてきたことを等閑視してきたことである。

本研究はこの「文化」としてキリスト教を取り上げ、それに関連してきた一連の大学、すなわちキリスト教系大学を対象とする。キリスト教系大学は、宗教という特殊な領域と関係しながら日本という「非キリスト教国」においても多数が存在し正当性を得て存続してきており、また、これまでは戦前期についての研究がほとんどであり戦後期における意味付けが看過されてきたという特徴を持つ。

本研究はこの対象について組織のレベルに着目して議論する。これまで主に議論されてきた法制度や教育内容のレベルではなく、キリスト教がその組織にたいして実質的に影響を与えてきたことを実証することによって、新しい戦後大学史へのアプローチを提示する。

とくに本研究は、キリスト教系大学がキリスト教制度と具体的にどのように関わってきたのかを示す。本研究では、宗教的適応という概念によって、「文化」的なものに適応する大学組織としてキリスト教系大学をとらえる。宗教的適応とは、組織一般が必要とする環境への適応のなかでも国家や法、経済などについてではない、構築された制度にたいする制度的適応の一つであり、とくに宗教にたいして適応することを指す。この宗教的適応の対象は、具体的なキリスト教の団体としての「教会」とキリスト教に関する認知と文化の体系である「思想」とに分けることができる。

この宗教的適応の具体的なメカニズムを解明するために、本研究では、組織フィールドと制度ロジックの概念を用いる。組織フィールドの概念により、制度によって形成された、単一の組織やその社会全体のレベルではなく、複数のキリスト教系大学とそれを取り巻くアクターらという、ミドル・レベルの対象に着目する。また、制度ロジックの概念によって、政治的・経済的な力ではなく、フィールドを構成する実践や象徴に着目することにより、キリスト教のような「文化」的対象を実質的に組織に影響を与えるものとして捉えることが可能になる。

本研究における重要な点は、キリスト教系大学が二つの制度の影響を受けるということをもメカニズムとして捉えるということにある。すなわち、その組織フィールドは単一なものではなく複雑な、多元性を持つものとして捉える。また、制度ロジックも、単一のものがあるわけではなくキリスト教の制度ロジックと大学の制度ロジックとが合わさり、ときには葛藤するものとして捉える。

本研究は、「はじめに」、本研究の中心的な部分である三つの部、および「おわりに」からなる。

「はじめに」では、本研究の目的を示し、先行研究の整理を行った。第 1 章では、本研究の目的が詳述された。第 2 章では、本研究全体の先行研究を宗教教育論、学校史、キリスト教研究・宗教研究、高等教育研究、組織論の五つの潮流に分けて概観することを通じて、本研究をこれまでの研究史に位置付けた。そこではとくに、宗教という、教育制度とは異質な制度との関係が着目されてこなかったことが明らかにされた。

第 1 部では、新制度派組織論の理論および高等教育の理論の検討を通じて、本研究の理

論的な枠組みを構築した。第 3 章では、新制度派組織論の議論から、本研究の対象であるキリスト教系大学が外的環境に適応するときいかなるメカニズムが働いているのかについて理論的に位置づけた。そこでは、高等教育組織は制度的に形作られた知識範疇を中心にした組織であること、その環境として多元的な組織フィールドを保持し、文化・認知的概念による適応の機会に開かれているという特徴を持つことが明らかとなった。第 4 章では、**Burton R. Clark** および **John W. Meyer** の議論から、高等教育機関と宗教とがどのように関係し得るのかについて、彼らの「文化」に関する分析を通じて議論し、宗教的適応の対象であるキリスト教、とくに思想の性質を説明することに有用であることを明らかにした。

第 2 部では、大学が宗教的適応を行う対象としての「宗教」には、現実に機関として存在する団体としてのキリスト教会への適応と意味体系としてのキリスト教思想への適応という二種が存在することを前提として、キリスト教系大学の内部組織の構造における二種の適応および教会への適応を分析した。

第 5 章と第 6 章では、分析の前提となる、キリスト教系大学の組織フィールドの形成と、キリスト教系大学の特徴を整理した。第 5 章では、戦前期のキリスト教系高等教育機関が組織となり法人となった過程を、法制度の面から理論的に検討することで、キリスト教会から分離したことを示した。このことは、そもそもキリスト教系大学が適応しなければならない対象が存在するようになったこと、および戦後における「基底世俗化」の原点となったことを示した。第 6 章においては、制度的な変数について宗教間で比較をすることによってキリスト教系大学の特徴を明らかにした。そこでは、キリスト教系大学は、他の宗教系よりも宗教制度との関連が強いことが示され、また、より多様であることが明らかになった。

次に、第 7 章では、教会から独立した大学の経営組織の構造において、キリスト教的な制度ロジックがどのように実体化しているのかを、学校法人の寄附行為の分析を通じて明らかにした。また、その宗教的適応においても、教会へのものと思想へのものが存在していることを明らかにした。

第 8 章と第 9 章では、キリスト教系大学における聖職者の養成と、神学部の構造と機能を分析することにより、大学がキリスト教教会への適応をどのように行ってきたのかを明らかにした。第 8 章では、大学と教育との学歴と資格制度を通じた教会への適応を構築してきたこと、ただし安定的な適応がなされてきたわけではないことが明らかになった。神学部の構造と機能を分析した第 9 章では、キリスト教的な制度ロジックに起因する困難と教会への適応における多様性が明らかになった。

第 3 部では、宗教的適応が戦後期においてどのように変動してきたのかを明らかにした。戦後占領期における状況、1960 年代において大学の大衆化に伴う適応のあり方が変動したこと、および現代的な宗教的適応のあり方を示した。

第 10 章では、占領期におけるキリスト教系高等教育機関の宗教的適応について、学校史の分析から、組織フィールドが再編され、そして新たな制度ロジックが生まれたことを明

らかにした。第 11 章では同じく占領期における国際基督教大学の成立に関する分析から、新たなキリスト教系大学が成立する際の条件について明らかにした。第 12 章では、キリスト教学校教育同盟における経営と管理に関する資料を分析することにより、大学経営に関する制度ロジックの関係により、教会との関係が薄まっていくこと、および拡大していく大学を運営していくこととキリスト教的であることとの間に葛藤が深まっていったことを明らかにした。

第 13 章では大学紛争期における学校史の分析を通じ、大学がキリスト教思想・教会と結合していることへの批判が存在し、これが宗教的適応におけるロジックを変化させ、ひいては大学組織の変動を惹起したことを明らかにした。そして第 14 章では、現代の認証評価資料の分析から、キリスト教そのものではなく理念を持つこと自体が社会的に適合的になってきたことを明らかにした。

「おわりに」の第 15 章では、本研究のまとめと、本研究の結果から導かれる課題と展望とを示した。キリスト教系大学の宗教的適応には教会と思想の二つの対象があり、それぞれへの適応のプロセスは異なっていたこと、すなわち、宗教と関わる際の多様性があること、および戦後期間を通じて宗教的適応のあり方が組織フィールドの複雑性および二つの制度ロジックに起因して変動してきたことが明らかにされた。これは日本における宗教概念の再考、そして近代における宗教と教育の関わり方に関する含意を持つことが述べられた。